

軽費老人ホーム(ケアハウス)の経営分析参考指標(平成27年度決算分)

1. ケアハウス（一般型）

(1) 機能性の状況

<p>ケアハウス（一般型）の有効集計対象707施設の機能性の状況は次のとおりです。</p> <p>① 平均の入所定員数は38.5人(前年度39.5人)でした。</p> <p>② 入所利用率は94.4%(前年度94.1%)で、前年度より0.3ポイントの増でした。</p> <p>③ 入所者10人当たり従事者数は全職種合計で1.72人（前年度1.71人）でした。</p>

区 分		ケアハウス(一般型)			
		平成26年度	平成27年度	増減(%ポイント)	対前年増減率(%)
施設数(施設)		568	707	-	-
平均入所定員数(人)		39.5	38.5	▲ 1.0	▲ 2.5
入所利用率(%)		94.1	94.4	0.3	0.3
1日平均入所者数(人)		37.2	36.3	▲ 0.9	▲ 2.4
定員1人当たりサービス活動収益(千円)		1,603	1,623	20	1.2
入所者1人1日当たりサービス活動収益(円)		4,667	4,695	28	0.6
1施設当たり 従事者数(人)	生活相談員	1.0	1.0	0.0	0.0
	介護職員	2.2	2.1	▲ 0.1	▲ 4.5
	その他	3.2	3.1	▲ 0.1	▲ 3.1
	計	6.3	6.2	▲ 0.1	▲ 1.6
入所者10人当たり 従事者数(人)	生活相談員	0.28	0.28	0.00	0.0
	介護職員	0.58	0.59	0.01	1.7
	その他	0.85	0.85	0.00	0.0
	計	1.71	1.72	0.01	0.6

(2) 収支の状況

ケアハウス（一般型）の収支の状況は次のとおりです。

- ① サービス活動収益対サービス活動増減差額比率は2.4%（前年度1.0%）で、前年度より1.4ポイントの増でした。また、サービス活動収益対経常増減差額比率は2.8%（前年度1.4%）で前年度より1.4ポイントの増でした。
- ② 人件費率は38.5%（前年度38.3%）で前年度より0.2ポイントの増、経費率は50.3%（前年度51.4%）で前年度より1.1ポイントの減でした。

区 分			ケアハウス（一般型）				
			平成26年度	平成27年度	増減(%ポイント)	対前年増減率(%)	
収 益	経常収益 構成比(%)	サービス活動収益	98.2	98.3	0.1	0.1	
		サービス活動外収益	1.8	1.7	▲ 0.1	▲ 5.6	
	サービス活動収益 構成比(%)	利用者等利用料収益	59.6	60.2	0.6	1.0	
		その他	40.4	39.8	▲ 0.6	▲ 1.5	
支 費 の 状 況	サービス活動費用の割合(%)	人件費	38.3	38.5	0.2	0.5	
		経費	51.4	50.3	▲ 1.1	▲ 2.1	
		事業費	30.4	29.1	▲ 1.3	▲ 4.3	
		(うち給食費)	(15.1)	(14.9)	▲ 0.2	▲ 1.3	
		事務費	21.0	21.2	0.2	1.0	
		減価償却費	9.1	8.7	▲ 0.4	▲ 4.4	
		その他	0.2	0.0	▲ 0.2	▲ 100.0	
		計	99.0	97.6	▲ 1.4	▲ 1.4	
		サービス活動収益対支払利息率(%)		1.1	0.9	▲ 0.2	▲ 18.2
		サービス活動収益対サービス活動増減差額比率(%)		1.0	2.4	1.4	140.0
サービス活動収益対経常増減差額比率(%)		1.4	2.8	1.4	100.0		
従事者1人当たりサービス活動収益(千円)		9,980	9,996	16	0.2		
労働生産性(千円)		3,942	4,091	149	3.8		
従事者1人当たり人件費(千円)		3,819	3,852	33	0.9		
労働分配率(%)		96.9	94.2	▲ 2.7	▲ 2.8		

(注1) 数値は四捨五入しているため、内訳の合計が合わない場合があります。

(注2) 従事者数については、非常勤職員及び委託職員は「常勤換算※1」を行っています。

(注3) サービス活動収益は、サービス活動費用の「利用者負担軽減額」を除いた金額で算出しています。

(注4) 減価償却費は、サービス活動費用の「国庫補助金等特別積立金取崩額(マイナス値)」を加えた金額で算出しています。

(注5) 経過的軽費老人ホーム(A型・B型)、開設後1年未満の軽費老人ホームの決算データは含まれていません。

2. ケアハウス（特定施設）

(1) 機能性の状況

<p>ケアハウス（特定施設）の有効集計対象205施設の機能性の状況は次のとおりです。</p> <p>① 平均の入所定員数は44.7人(前年度46.0人)でした。</p> <p>② 入所利用率は95.3%(前年度95.5%)で、前年度より0.2ポイントの減でした。</p> <p>③ 入所者10人当たり従事者数は全職種合計で5.03人(前年度5.07人)でした。</p>
--

区 分	ケアハウス(特定施設)				
	平成26年度	平成27年度	増減(%ポイント)	対前年増減率(%)	
施設数(施設)	173	205	-	-	
平均入所定員数(人)	46.0	44.7	▲ 1.3	▲ 2.8	
入所利用率(%)	95.5	95.3	▲ 0.2	▲ 0.2	
1日平均入所者数(人)	44.0	42.6	▲ 1.4	▲ 3.2	
うち介護サービスを受けた入所者の割合(%)	73.6	73.4	▲ 0.2	▲ 0.3	
平均要介護度	1.99	2.00	0.01	0.5	
定員1人当たりサービス活動収益(千円)	3,225	3,209	▲ 16	▲ 0.5	
入所者1人1日当たりサービス活動収益(円)	9,253	9,203	▲ 49	▲ 0.5	
1施設当たり 従事者数(人)	生活相談員	1.2	1.1	▲ 0.1	▲ 8.3
	介護職員	14.2	13.6	▲ 0.6	▲ 4.2
	その他の職員	6.9	6.7	▲ 0.2	▲ 2.9
	計	22.3	21.4	▲ 0.9	▲ 4.0
入所者10人当たり 従事者数(人)	生活相談員	0.26	0.26	0.00	0.0
	介護職員	3.23	3.20	▲ 0.03	▲ 0.9
	その他の職員	1.57	1.57	0.00	0.0
	計	5.07	5.03	▲ 0.04	▲ 0.8

(2) 収支の状況

ケアハウス（特定施設）の収支の状況は次のとおりです。

- ① サービス活動収益対サービス活動増減差額比率は6.7%(前年度8.1%)で、前年度より1.4ポイントの減でした。また、サービス活動収益対経常増減差額比率は6.0%(前年度7.6%)で前年度より1.6ポイントの減でした。
- ② 人件費率は56.4%(前年度54.4%)で前年度より2.0ポイントの増、経費率は29.5%(前年度29.2%)で前年度より0.3ポイントの増でした。

区 分			ケアハウス(特定施設)				
			平成26年度	平成27年度	増減(%ポイント)	対前年増減率(%)	
収 支 の 状 況	収 益	経常収益 構成比(%)	サービス活動収益	98.8	99.0	0.2	0.2
		サービス活動外収益	1.2	1.0	▲ 0.2	▲ 16.7	
		サービス活動収益 構成比(%)	介護保険関係収益(居宅介護料収益等)	58.3	58.1	▲ 0.2	▲ 0.3
			利用者等利用料収益	29.8	30.3	0.5	1.7
			その他	11.9	11.6	▲ 0.3	▲ 2.5
	費 用	サービス活動費用の割合(%)	人件費	54.4	56.4	2.0	3.7
			経費	29.2	29.5	0.3	1.0
			事業費	17.7	17.3	▲ 0.4	▲ 2.3
			(うち給食費)	(8.2)	(8.5)	0.3	3.7
			事務費	11.5	12.1	0.6	5.2
減価償却費			8.3	7.5	▲ 0.8	▲ 9.6	
その他			0.1	0.0	▲ 0.1	▲ 100.0	
計	91.9	93.3	1.4	1.5			
サービス活動収益対支払利息率(%)			1.4	1.4	0.0	0.0	
サービス活動収益対サービス活動増減差額比率(%)			8.1	6.7	▲ 1.4	▲ 17.3	
サービス活動収益対経常増減差額比率(%)			7.6	6.0	▲ 1.6	▲ 21.1	
従事者1人当たりサービス活動収益(千円)			6,667	6,693	26	0.4	
労働生産性(千円)			4,169	4,219	50	1.2	
従事者1人当たり人件費(千円)			3,625	3,772	147	4.1	
労働分配率(%)			86.9	89.4	2.5	2.9	

(注1) 数値は四捨五入しているため、内訳の合計が合わない場合があります。

(注2) 従事者数については、非常勤職員及び委託職員は「常勤換算※1」を行っています。

(注3) サービス活動収益は、サービス活動費用の「利用者負担軽減額」を除いた金額で算出しています。

(注4) 減価償却費は、サービス活動費用の「国庫補助金等特別積立金取崩額(マイナス値)」を加えた金額で算出しています。

(注5) 経過的軽費老人ホーム(A型・B型)、開設後1年未満の軽費老人ホームの決算データは含まれていません。

経営諸比率(ケアハウス)

経営指標	算 式	説 明
入所利用率	$\frac{\text{年間延べ入所者数}}{\text{年間延べ定員数}} \times 100$	施設の地域のニーズへの適合性を把握します。併せて要支援者数及び要介護者数の割合を把握しておく必要があります。入所率が低い場合は、地域のニーズ、競合施設等の把握が必要になります。サービス活動収益を決定づけるものであり、最も重要な経営指標です。
平均要介護度	$\frac{(\text{要支援等の人数} \times 0) + (\text{要介護度1の人数} \times 1) + (\text{要介護度2の人数} \times 2) + (\text{要介護度3の人数} \times 3) + (\text{要介護度4の人数} \times 4) + (\text{要介護度5の人数} \times 5)}{\text{人数合計}}$	施設の機能を平均要介護度から把握します。入居者の介護度はサービス活動収益にも影響しますので、要介護度分布も把握する必要があります。
定員 1 人 当 たり サービス活動収益	$\frac{\text{サービス活動収益}}{\text{入所定員}}$	定員（短期入所専用床を含む）1人当たりの年間サービス活動収益から、施設サービスの内容を把握します。管理費収入、利用率や規模によっても異なります。
入所者1人1日当 たりサービス活動 収益	$\frac{\text{サービス活動収益}}{\text{年間延べ入所者数}}$	入所者1人1日当たりの収入から施設のサービス内容を把握します。平均要介護度の他に室料差額、利用料の設定等、サービスの実施状況によっても異なります。
入所者10人当 たり従事者数	$\frac{\text{年間平均従事者数}}{\text{1日平均入所者数}} \times 10$	従事者数の面から施設のサービス内容を把握します。入所率が低い場合は、大きくなります。外部委託の状況によっても異なることに留意する必要があります。
従事者1人当 たり人件費	$\frac{\text{人件費}}{\text{年間平均従事者数}}$	いわゆる給与水準であり、労働意欲やサービス内容に関係する一方、生産性に対応していなければ経営の安定性を損なうことになります。したがって、平均年齢、職種別従事者数等によっても異なることに留意しながら、従事者1人当たりサービス活動収益や労働生産性との関係においてその適正性を判断する必要があります。
人件費率	$\frac{\text{人件費}}{\text{サービス活動収益}} \times 100$	従事者数及び給与水準に留意しつつ、その適正性を判断します。併せて労働分配率にも留意する必要があります。
給食費率	$\frac{\text{給食費}}{\text{サービス活動収益}} \times 100$	入所者1人1日当たり給食費に留意しつつ、その適正性を判断する必要があります。
経費率	$\frac{\text{諸経費}}{\text{サービス活動収益}} \times 100$ <p>※経費＝サービス活動費用－(人件費＋給食費＋減価償却費＋国庫補助金等特別積立金取崩額[マイナス値])</p>	経費率が高い場合は、外部委託費等個々の経費ごとに適正性を判断する必要があります。なお、当資料中の「経費」の値には、給食費が含まれております。経費率を計算される場合には、再掲した給食費を除いてください。

減価償却費率	欄外に記載(※2)	償却資産の構成割合及びそれぞれの経過年数に留意しつつ、その適正性を判断します。
サービス活動収益対支払利息率	$\frac{\text{借入金利息}}{\text{サービス活動収益}} \times 100$	借入金残高、借入条件等から支払利息の適正性を判断します。
従事者1人当たりサービス活動収益	$\frac{\text{サービス活動収益}}{\text{年間平均従事者数}}$	従事者1人当たりどの程度のサービス活動収益を得ているかによって、従事者1人当たりの効率を判断します。
労働生産性	$\frac{\text{付加価値額}}{\text{年間平均従事者数}}$ ※付加価値額＝サービス活動収益－（事業費＋事務費＋減価償却費＋国庫補助金等特別積立金取崩額[マイナス値]＋徴収不能額）	従事者1人がどれだけの付加価値を生み出したかをみます。労働生産性が高ければ、各々の従事者が効率よく価値を生み出し、円滑な運営管理が行われているといえます。
労働分配率	$\frac{\text{人件費}}{\text{付加価値額}} \times 100$	付加価値が人件費にどれだけ分配されているかをみることで、経営の効率性を把握します。人件費を支払原資（付加価値額）のなかで収めるのは当然のことですが、質と意欲に関係するので、低ければ良いというものではありません。
サービス活動収益対サービス活動増減差額比率	$\frac{\text{サービス活動増減差額}}{\text{サービス活動収益}} \times 100$	施設経営上の収支状況を端的に表します。上昇、横ばい、下降等の経時基調に留意する必要があります。 マイナスの場合は、純資産比率を低下させ、経営の安定性を損なうこととなります。マイナスの場合等の要因分析は、機能性の把握及び各費用率等の適否を判断します。 収支の状況と財務の状況の双方に表章されますが、集計サンプルが異なるため、両者で数値が一致しないことがあります。
サービス活動収益対経常増減差額比率	$\frac{\text{経常増減差額}}{\text{サービス活動収益}} \times 100$	

※1 常勤換算は次の式で算定しています。

$$\frac{\text{当該職務にかかる全非常勤職員の1週間の総勤務時間数}}{\text{当該職務にかかる常勤職員が1週間に勤務すべき時間数}}$$

※2 減価償却費率の算式

(減価償却費＋国庫補助金等特別積立金取崩額 [マイナス値])

サービス活動収益